

# 佳作

## 『マンザナ、わが町』 井上ひさし著

文学部 4 年 古澤龍平

第二次世界大戦中に日系アメリカ人が収容されたカリフォルニア州マンザナ強制収容所を舞台にした井上ひさしの戯曲作品。女優ばかり 5 人の芝居で、2015 年 10 月、こまつ座によって 18 年振りに再演された。

登場人物たちは、所長の命令により「マンザナは強制収容所ではなく、日系人の自治によって運営される町である」という内容の朗読劇を上演させられることになる。演出を担当するソフィア岡崎は、演劇経験のあるジャーナリスト。他の 4 人も浪曲師、マジシャンのアシスタント、歌手、ハリウッド女優と芸達者な者ばかり。しかし、彼女たちは人種差別に遭いながら、必死にアメリカ社会を生きてきた人たちでもある。アメリカは自由の国でありながら、市民権を持つ日系人二世をも強制的に収容した。そんな怒りを抱きながらも、それとは裏腹な芝居を上演しなければならない。そしてその稽古中、5 人のうちの一人がアメリカ政府のスパイだということが明らかになる。

初めは押し付けられた上演に文句ばかりの彼女たちだったが、次第に自ら工夫を重ねるようになり、稽古は楽しいものへと変わっていく。この辺りは、アメリカから与えられた民主主義を自らのものにしていこうという井上ひさしの提案、あるいは日本戦後史の理想的な読み替えと解釈することもできる。どちらにしろ、作者が一貫して描いてきた理想郷の建設というテーマがここには見て取れる。

結局、作者はアメリカにおいて不当な扱いを受けた日系人の姿を通して、人々を虐げる権力の構造を描いている。そこに国の違いはない。むしろ被害者としての日本人を描き出すほどに、加害者としての日本人の姿が浮かび上がってくる。そこにあるのは、国と国との戦いではなく、虐げるものと虐げられるものの戦いである。ラストで上演される、登場人物たちによって“改変された”朗読劇が、マンザナの自然の美しさ、そして人間存在の素晴らしさを謳うものだったというところに、その答えがあるだろう。

この作品の舞台となった 1942 年から 46 年後、アメリカはレーガン大統領が強制収容を公式に謝罪。一人当たり 2 万ドルの補償金を支払った。それまでの年月の長さ、すでに 5 万人以上の対象者が死亡していたという事実が重くのしかかるが、それでもどこか、そこには私たちがイメージする「良きアメリカ」というものの精神が感じられる。このニュースを知ったことが、作者の執筆の直接のきっかけになったという。では、私たちはどうだろう？井上ひさしは問いかける。

「過ちて改めざる、是を過ちという」古い言葉を持ち出すまでもなく、過ちを認めることは、決して自虐ではないはずだ。